

目次

はじめに 西尾雄志	4
-----------	---

地域社会・災害ボランティアおすすめチャート	6
-----------------------	---

第1章 まちづくりを進める

地域活性化ボランティア	
-------------	--

まちスウィング	10
---------	----

イベントで出会いを生み、だれも排除しない地域をつくる

地域人材育成ボランティア	
--------------	--

まるオフィス	14
--------	----

地域の次世代を育てる学びの場をつくる

第2章 伝統文化を伝える

民俗芸能保存ボランティア	
--------------	--

鬼柳鬼剣舞保存会	20
----------	----

地域に息づいてきたおどりを次の世代に伝える

町なみ保存ボランティア	
-------------	--

肥前浜宿水とまちなみの会	24
--------------	----

昔の町なみを再生・保存し、活用しながら受けつぐ

地域社会や災害の課題にとりくむボランティアの活動を見てみよう。



第3章 災害にそなえる

災害緊急支援ボランティア	
--------------	--

OPEN JAPAN	30
------------	----

被災地への緊急支援を顔の見えるつながりで行う

地域防災ボランティア	
------------	--

レスキューストックヤード	34
--------------	----

日ごろから災害への準備をして防災・減災につなげる

防災教育ボランティア	
------------	--

プラス・アーツ	38
---------	----

防災の知識や技術を楽しく遊びながら身につける

解説 地域社会・災害とボランティア	42
-------------------	----

さくいん	47
------	----

ボランティアとSDGs

2015年9月25日の国連サミットで、地球環境を保全しながら発展をつづけるための目標「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択されました。SDGsは、2016年から2030年の15年間で国連加盟国が達成すべき17の目標(ゴール)と169のターゲット(ゴールにいたるための具体的な課題)で構成されています。17の目標は、国だけでなく企業や市民が参加し、社会全体で達成をめざすものとされています。本書では、ボランティアの活動をSDGsの観点からとらえ、SDGsのどの目標にかかわるかを右のアイコンでしめています。



団体名の表示について

この本で活動を取りあげている団体には、NPO法人および認定NPO法人がふくまれます。NPO法人は、NPO法人(特定非営利活動法人)制度にもとづき、団体の名前で契約や取引ができる法人格を得た団体です。認定NPO法人は、NPO法人のなかでも、その団体に寄付した人が税の優遇を受けられる団体です。

NPO法人は特定非営利活動法人ともよばれますが、この本ではNPO法人と記します。また、各団体の種類は「団体データ」内の「団体名称」にしめます。

ひ さい ち
被災地への緊急支援を

顔の見えるつながりで行う

オープン ジャパン
OPEN JAPAN

さいがい ふつきゅう ひ さい ち
 災害の復旧活動は、被災地の人たちだけではできません。
 げん ち ぎょうせい ふく し そ し き
 現地の行政や社会福祉協議会などの組織を
 こ じん だんたい きぎょう
 中心に、全国からかけつけた個人や団体、企業などがボランティアとして協力し、必要とされる支援
 し えん
 を行うことで、少しずつ復旧の方向へと動いていきます。
 オープン ジャパン
 OPEN JAPAN は個人や組織による横のつ
 ながりを全国にもつボランティア団体として、被災者といっしょに災害支援を行っています。

そ し き
 人や組織どうしの
 つながりをつくって
 し えん
 支援しているんだね。



だんたい
団体データ

だん たい めい しょう	いっぽんしゃだんほうじん オープン ジャパン
団 体 名 称	一般社団法人 OPEN JAPAN
せつ 立	2012 年
しよ 在 地	宮城県石巻市駅前北通り 1-5-23
でん 話	0225-92-7820
ファクス	0225-92-7820
メー ル	info@openjapan.net
ホームページ	http://openjapan.net

一つ屋根の下での活動が原点

オープン ジャパン
 OPEN JAPAN の活動の原点は、1995 年の
 はんしん あわ じ だいいんさい
 阪神・淡路大震災のときに
 し えんだんたい こう べ げん き むら
 生まれた支援団体「神戸元気村」です。2011 年の東日本大震災直後に、
 いのまき し
 その仲間たちが宮城県石巻市に結集し、そこで出会った 2 人が「ボラン
 し えん きずな
 ティア支援ベース絆」を立ちあげました。

支援活動の拠点（ベース）として石巻市内の集会所を借りあげ、一つ屋
 根の下で食事やねとまりをともにしながら、朝になるとそれぞれの活動現
 ば
 場に出むきました。夕方、ベースにもどってくると、その日の活動内容や

こまっていることなどを報告しあい、それを
 ひ さいしや
 ときには被災者をふくむ人たちみんなで共有
 かいけつ
 し、解決のためのアイデアを出しあう。こ
 れをくりかえしたのです。そこではおたがいの
 泣いた顔、おこった顔、こまった顔、笑っ
 た顔など、さまざまな顔が見られ、「明日のく
 らしを少しでもよくしていきたい」という思
 いで、さまざまなところから集まってきた人
 たちが真剣に向きあうすがたがありました。

その後、東日本大震災からまる 1 年がたっ
 た 2012 年 3 月を機に、OPEN JAPAN として
 さいいしゅうぱつ
 再出発しました。この名前は「開け！ ニッ
 ポン」という意味で、日本を切りひらいてい
 くという願いがこめられています。

たいざい
長期滞在して、いまここに

必要な支援を行う

日本各地には多くの災害復旧支援のボラン
 だんたい
 ティア団体がありますが、オープン ジャパン
 の特徴は、現地に自分たちの活動拠点をもうけ
 たうえで、ボランティアの仲間たち（個人や
 そ し き
 組織）が必要におうじてプロジェクトを組みながら、滞在型の支援を行っ
 ていることです。

たとえば、災害が起ると、1 日～2 日のうちに OPEN JAPAN のスタッ
 フが被災地に向かいます。1 つの災害の被災地はふつう 1 か所ではあ
 りません。大事なのは、どの被災地に向かうかということです。OPEN
 JAPAN の場合は、ボランティアが集まりにくそうなところ、交通の便の
 悪いところ、高齢者の多いところ、地域のももとのつながりが弱そう
 なところなどに出むくようにしているといいます。

被災地に着いたスタッフは、地元の行政や社会福祉協議会などの担当
 者から、被災状況や必要とされる支援内容
 を聞きとります。現地の人たちも突然の災
 害で何をしてよいかわからないことがあり、
 そんなときは応急的な対応をいっしょに考
 えたり、災害ボランティアセンターの開設
 や運営などを手伝います。また、復興活動
 を公的な費用で行うのか、被災者個人の費
 用で行うのかによっても支援のしかたが変
 わるので、国の災害支援制度を利用するか
 どうかなど、いくつもの方法を組みあわせ
 るコーディネート力がもとめられます。



ひ だ ひろし
副代表の肥田 浩さんに

聞きました



東北出身、3 月 11 日が誕生日という
 こともあり、東日本大震災のあと愛知県
 から宮城県に行きました。3 日間の予定
 だったボランティアが、気がついたら
 オープン ジャパン
 OPEN JAPAN に加わっていて、被災地から被災地へ
 とうつつっていく「住所不定の車中泊生活」がつづいて
 います。災害ボランティア活動には不思議な力があり、
 自分たちがだれかに助けられると、こんどはそれをだ
 れかにしてあげたくなる人が多いです。「過去から未来
 への恩送り」とでもいうのでしょうか。



必要におうじて、災害ボランティアセンターの会合に OPEN JAPAN のスタッ
 フが参加します。



団体スタッフの声 手代千賀さん



2014年8月豪雨による、広島土砂災害の被災地に出かけたのが、はじめてのボランティアでした。それまでは「ボランティア＝体を使う肉体労働」と思っていたのですが、被災地に「人」のくらしがあったことを知り、心が大きくゆさぶられました。OPEN JAPANのスタッフになって4年めですが、いろいろな人の生きかたに出会い、刺激的すぎる毎日をすごしています。この経験を自分だけのもので終わらせないようにしたいと思っています。

同時に、災害現場を見て歩きます。道路や庭での土砂の撤去が必要なら、工事に使うような重機を運びいれ、資格をもつ人が操作します。どろ水などでよごれてしまった家を再建するときは、OPEN JAPANがかべをはがすまでの作業をしたうえで、大工さんに引きわたします。

OPEN JAPANはさまざまな専門技術をもっているボランティアと連携して活動していますが、直接声をかけることはしないそうです。声をかけると、そこに行けない場合に返事がしづらいという、ボランティアならではの気持ち察しているからです。代わりに、被災地の写真をSNSにアップします。経験豊富な

ボランティアは、その写真を見れば必要とされる支援が想像できます。能力や時間的な問題をふまえ、参加できそうだったと思ったときに、OPEN JAPANに参加の意思表示をします。

美容師や調理師などの資格をもつ人が行う、被災者の生活をささえる活動もあります。被災地では時間の経過とともに必要となる支援が変わり、特別な技術をもっていなくてもできる活動もたくさんあります。生活が落ちついてくると、被災者のそばでじっくりと話を聞く人がもともと



土砂くずれの現場では、各地からかけつけたボランティアが重機を使って、住宅におしよせた土砂をとりのぞきます。

られます。ときには心が晴れる楽しいイベントも必要です。OPEN JAPANは地元の人たちといっしょに、水害被災地で解体される家に子どもたちが絵をかくイベントを行いました。被災した子どもたちが思いきり好きな絵をかいて、大成功だったといえます。

制度と災害支援団体が 手を取りあう

OPEN JAPANの活動は、全国各地の支援者（個人や企業など）からの寄付金でささえられています。寄付は毎月定額制または個別になど、さまざまなかたちでできます。被災地にかけつけるだけでなく、活動に必要な資金や物品の寄付という援助の方法もあります。

寄付金の使い道は、スタッフが被災地で活動するための燃料代や機械のリース代がいちばん多くなっています。ただ、団体に属してはたらくスタッフへの給料はじゅうぶんにしはらえていないのが現状で、現地にかけつけるボランティアの移動費などは個人負担が原則です。

OPEN JAPANが発足して10年あまり。たくさんの支援者や活動参加者にめぐまれています。副代表の肥田浩さんは「ボランティアの限界を感じている」といいます。最近の自然災害は規模が大きくなり、かつひんぱんに起こっているのも、法制度やしくみの見なおしが必要です。制度と災害支援団体がどのように手を取りあえるのかが大きな課題になっています。

災害が起こると、それまでおさえられていた社会のフタがとれて、弱い部分があらわになります。「その先の笑顔のために」を合いことばに、OPEN JAPANの活動はこれからもつづいていきます。



団体スタッフの声 川島莉生さん



親が東日本大震災で被災した福島県の子どもたちを徳島県に招待し、中学生だった自分もいっしょに遊んだことがあって、2012年以降、東日本大震災の被災者支援にかかわっています。サッカーが好きでドイツに留学していたのですが、コロナ禍で2020年春に帰国し、OPEN JAPANのスタッフになりました。被災地では力仕事のほか、お年よりや子どもたちの話し相手もしています。自分のような若い者にもできるボランティアがあることを伝えたいです。



避難所では、よく子どもたちに絵本の読みかきせをします。